

名証上場、後進に道譲る

勇者の挑戦

ぎふ財界人列伝
バローホールディングス編

「社長の在任期間が長く、72歳の高齢となった。競争の激しい流通業界の中で社業も軌道に乗り、バトンタッチすることにした」。1994年5月、名古屋証券取引所で行われたバローの決算会見。伊藤喜美は会長に退き、専務の田代正美が社長に就任すると発表した。46歳の田代は「地位ではなく理念の継承を念頭に、バローの発展に努めたい」と、集まった記者を前に語った。

「上場後に後進に道を譲る」。伊藤は以前から、そう考えていた。もちろん指名するのは自ら入社を勧め、二人三脚で経営に当たってきた田代と決めていた。ただ、事業承継のタイミングとなった株式公開については、当初から関心があった訳ではなかった。

バローは着実に業績を伸ばしていた。成長に伴い、いくつか課題を抱えていた。恵那市の事務所が手狭になり、91年には本部も多治見市に移した。株式を公開する。考えを変えざるをえなかったのが人材不足だった。「株式公開によって、バローの知名度が上がれば有能な人材を獲得できる」と考えた。

伊藤は、折に触れて「企業は人なり」「バローは人をつくる会社」「モラルの高い人材がいる企業が発展する」と言い続けてきた。社員教育も体験を踏まえた厳しい軍隊式だった。99年の社内報にはこんな原稿を書いている。武将・武田信玄の言葉に「人は石垣、人は城」がある。城そのものより、それを守り維持する兵の方が大切。すなわち店そのものより、それを維持する精鋭の社員がいる店が一番強いというところである」。考えを明快に伝え、社員らを鼓舞した。

い込み、岐阜県が本拠地の地方スーパ―に、そう簡単に人材は集まらなかった。大手メーカーにいた田代を誘った時、目標に掲げた売上高に当たる営業収益500億円の大台は見えていた。株式公開を決断し、93年、名古屋証券取引所第2部への上場を果たした。「社員の誇りとやる気を引き出す刺激剤になった」と喜び、「企業は上場すると私企業から公の企業となり、地域社会に貢献する義務を持つ。上場は地域社会貢献への一里塚」と位置付けた。

経営トップを退いた伊藤は、その後、年齢を重ねて相談役名譽会長になった。東京のホテルで療養生活を送りながら、会社にあわせて存在感を放った。流通業の草分けの一人として活躍し、一時代を築いた伊藤は2015年7月7日、93歳で生涯の幕を下ろした。バローが9月7日に名古屋市のホテルで開いたお別れの会には政財界、地元関係者ら約2100人が参列した。会長兼社長の田代は、追悼の言葉で「創業者の理念と意志は、今後もバローの伝統としてしっかり受け継ぐ」と宣言した。

小売業で中部地方2位に育て上げた伊藤と、切磋琢磨したユニグループ・ホールディングス社長の佐古則男（下呂市出身）は、「（バローを）中部を代表するスーパ―に育てられた偉大な経営者だった」と敬意を表した。

恵那市では、伊藤が寄贈した市中央図書館で「追悼展」が開かれ、地元出身の偉大な経営者で地域の発展に尽力した伊藤の功績をたたえた。（敬称略）



穏やかな表情をみせる伊藤喜美さんの遺影に花を手向ける参列者ら。2015年9月、名古屋市中区、ウェスティンナゴヤキャッスル



故伊藤喜美氏の関連書物などを並べた追悼展。恵那市長島町、市中央図書館